様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２００４８

研究課題名（和文）ヴェーダ祭式文献における「祭主の章」：宗教，社会，生活の変遷の解明の為に

研究課題名（英文）Study on the chapter of a sacrificer in the Veda

研究代表者
西村　直子（Nishimura, Naoko）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：９０３７２２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：ヴェーダ祭式は一般に，祭主が自らの願望成就を目的とし，祭官に挙行を依頼するという形式を取る。祭官は祭式によって祭主と神々とを仲介し，祭主は祭官に報酬を払う。ヴェーダ文献には，祭官と祭主との関係を巡る議論が数多く現れる。しかし，祭主の実態については殆ど解明されておらず，王族による祭主としての祭式への参与が，元来は制限されて部分的にしか認められていなかったことも，殆ど知られていない。社会や生活の変化に伴い，「祭主」のあり方も変化する。本研究では，ヴェーダ文献における「祭主の章」の翻訳と注解を通じ，当時の祭式や思想の内実と社会の変動とを解明するための，1つの確実な資料を提示することを目指した。

研究成果の概要（英文）：Vedic ritual is held by priests who are commissioned to organize it in order to fulfill a sacrificer's desire. Although Vedic literature includes many discussions on relationship between a priest and a sacrificer, it remains unclear how the life or status of a sacrificer is in reality. Besides that, the fact is not sufficiently known that the early Vedic priests admitted a king's participation as a sacrificer under a quite limited situation only. We can be sure that the alteration of their life or society influences the state of a sacrificer. This study aims to provide with a stable source to clarify the actual condition of their religion and the development of their society.

研究分野：印度哲学・仏教学

キーワード：ヴェーダ祭式　ヤジュルヴェーダ　祭主　マントラ　ブラーフマナ　古代インド　新月祭・満月祭　印欧語比較言語学

１．研究開始当初の背景

(1)　研究代表者は博士論文（2002 年，東北大学）以降，ヤジュルヴェーダ各学派の全文献に基づく新月・満月祭の準備日に関する研究を，マントラ（一々の祭式行為に伴って唱えられる祭詞，祝詞）とブラーフマナ（マントラの解釈，神学議論等）を基本資料として行ってきた。その中で，新月・満月祭の歴史的展開とヤジュルヴェーダ学派及び同派の文献成立史に関するいくつかの仮説を提示した。就中，以下の 2 点が重要である:「1. 一般に理解されている供物とその対象となる神格との組み合わせは，祭式綱要書（シュラウタスートラ，B.C.5C 頃）まで遡れるが，より古い本集（サンヒター），儀規文献（ブラーフマナ）の段階（B.C.10－7C 頃）では未だ定式化されていなかった可能性が強い; 2. ヤジュルヴェーダの主要 4 学派（マイトラーヤニーヤ，カタ，タイッティリーヤ，ヴァージャサネーイン）は史的展開の点から保守的な前 2 者と革新的なヴァージャサネーイン派とに分けられ，タイッティリーヤ派はその中間に位置すると考えられる」。

(2)　今回申請する「祭主の章」の研究は，前述の仮説 1.と密接に関係している。供物に関する史的変遷を跡づけるためには，古層の文献に遡って新月祭，満月祭それぞれの式次第を確定し，供物の調理過程がどのように組み込まれているかを吟味する必要がある。その鍵となるのが，例えば祭主の準備日の行動，特に「いつ誓戒（ヴラタ）に入るのか」という問題であり，また特定の供物（ｻｰﾝﾅｰｨﾔ）を献供する条件として祭主に課せられる，「ソーマ祭挙行経験者」という資格を巡る議論である。新月・満月祭については，殆ど唯一の先行研究である HILLEBRANDT の Das altindische Neu- und Vollmondsopfer (Jena 1897）以降，祭式綱要書の定式化した式次第等が，固定的なものとして理解されてきた。しかしながら，本研究課題が今回基本資料とする古層の文献には，定式化に至る以前の議論が伝えられている。その中にあって，「祭主」という存在が祭式の変容及び神学議論の展開の根幹に関わっていることは，前述の仮説 1.を巡る議論からも容易に推測できる。更に，王族階級による祭主としての祭式への参与も，祭式の定式化と神学議論（特に，死後の在り方を巡る輪廻と業の議論）の深化とに多大な役割を果たしたことが，阪本（後藤）純子（『印度学仏教学研究』53-2，pp.58－64，2005 など），研究代表者等の研究から近年明らかにされてきた。ヴェーダ時代における社会構造の変化については，RAU の Staat und Gesellschaft im alten Indien. Nach den Brāhmaṇa-Texten dargestellt (Wiesbaden 1957) が大筋の経過に洞察を与えているものの，その後蓄積されてきたヴェーダ祭式文献学並びに印欧語比較言語学の諸成果に基づいて，更なる精密化，再検討が可能な段階に達していると判断される。「祭主」が祭式及び社会に果たした役割を明らかにすることにより，ヴェーダ時代の宗教や社会がダイナミックに変化してゆく過程を解明する為の重要な手がかりが得られると確信し，本研究課題に着手した。

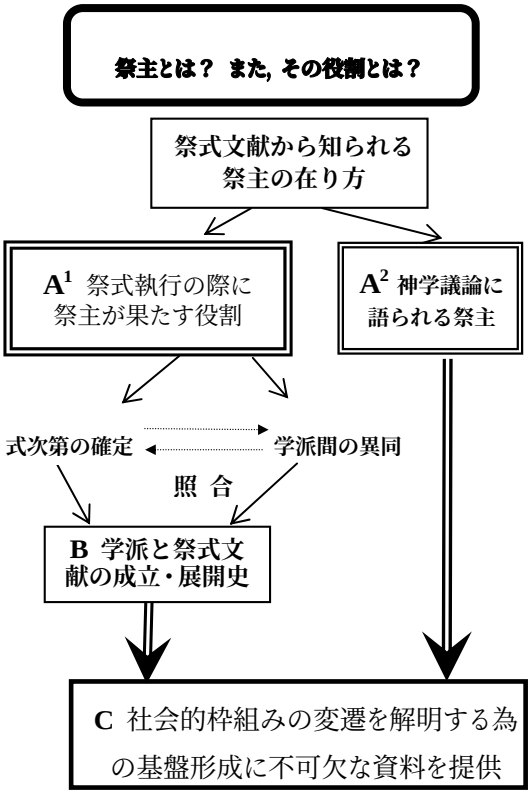
２．研究の目的

(1)　最古の『リグ・ヴェーダ』（B.C.1200 頃編集固定）以来，インドにはバラモン（祭官），ラージャニャ／クシャトリャ（王族），ヴァイシャ（庶民），シュードラ（隷属民）という 4 階級の存在が伝えられている。ヴェーダ文献は祭官階級の為に編纂されたものであるが，他の 3 階級への言及も少なくない。元来は祭官階級の祭主が基準とされていたと考えられるが，王族や庶民階級に属する者が祭主となる場合の変更点や，各祭式において王族が参与できるか否かを問う議論は，当時のヴェーダ祭式を取り巻く社会的枠組みが変動期にあったことを窺わせる。バラモンの祭式万能主義に対するアンチテーゼから沙門（自由思想家）が台頭し，やがてブッダが現れる。当時のインドにおいて新たな価値観が構築されてゆく際の背景となる思想史的展開を，祭主の議論は伝えている。本課題の成果はヴェーダの文献や祭式にとどまらず，インドの思想や歴史をも解明するために不可欠な資料を提供するものである。更に，歴史学や宗教学等の諸成果ともに，今日我々が新しい価値観を模索して行く上での手がかりともなることが見込まれる。

３．研究の方法

黒ヤジュルヴェーダ各学派のサンヒターにまとめられている「祭主の章」のマントラ集成及びそのブラーフマナについて，ローマナイズド・テキストの作成と翻訳，注解を行う。白ヤジュルヴェーダ学派の文献には「祭主の章」に相当するものは存在しないが，平行関係にあるマントラや対応する議論をその都度吟味する。また，「祭主の章」が新月・満月祭において祭主の唱えるべきマントラを基盤として構成されているため，ヤジュル

ヴェーダ学派の新月・満月祭に関するマントラとそのブラーフマナについても，テキストの作成と翻訳，注解を行う。これらの作業を通じて，「祭主」の実態と彼が具体的な祭式の場面，神学議論の展開において果たした役割とを明らかにする（下図の A)。その過程で得られた， 学派及び祭式文献の成立史の解明に重要な示唆を与える諸要素を精査し（B)，社会全体の枠組みの変遷を明らかにする上で必要不可欠な資料を提供する（C)。



これらの中で，文献の精査から直接明らかになるのが A である。祭主が祭式で担う具体的な役割だけでなく，「祭式と布施の効果（イシュタープールタ)」を巡る神学的議論が祭主と祭官との関係を軸として展開してゆくことも理解される。更に，具体的な祭式議論の記述は，王族の隆盛や祭主の祭官に対する信頼に揺らぎが生じていたこと，祭式万能主義が求心力を失い，苦行者（沙門など）の登場を促した過程を明らかにする為の手がかりをも与えてくれる。従来は古ウパニシャッド（B.C.600 頃）の記述がこのような思想及び社会の変遷を辿る資料とされてきたが，その後の研究成果により，現在では更に古層のブラーフマナにも重要な議論が数多く残されていることが明らかとなった。それらを精査してゆく為の研究的基盤も整いつつある。また，ウパニシャッドには祭官と王族とが対等関係にあることを窺わせる記述も少なくないが，ブラーフマナからは祭官が優位性を保とうと腐心していたことも明確に読み取れる。本研究課題の遂行により，新月・満月祭の式次第などの個別的・直接的な解明が見込まれるのみならず，更に大きな枠組み（B 祭式文献の成り立ち，C 社会）を明らかにする上で必要不可欠な資料をも確実に提供することが可能となる。

４．研究成果

(1)　2012 年度は，ヤジュルヴェーダ各学派のサンヒター及びブラーフマナにおける「祭主の章」について，批判的テキストの作成，翻訳，注解を中心に研究を進めた。この間に，各学派間の対応を吟味してゆく過程で，平行関係の認められる章と認められない章とが存在し，その平行関係の有無は章ごと，或いは学派ごとにことなっていることが明らかになった。この複雑な伝承状況を整理してゆく為に，「祭主の章」自体の精査に先駆けて，ヴェーダ祭式の基本となる「新月祭・満月祭」に関する調査を優先的に行う必要がある。この年度は準備日のマントラの章を精査し，式次第にかかわる問題（祭官のマントラと祭主のマントラとの前後関係など）の解明を目指して，ヤジュルヴェーダ各学派の近縁関係を明らかにする為の比較検討を行った。また，祭主の来世をも左右する「男児の誕生」に関して，出産儀礼並びに神話についても精査した。

(2)　2013 年度は，「祭主の章」の前提とされる伝承を解明する為に，『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』（B.C. 7 世紀頃）に納められる新月・満月祭の準備儀礼（upavasatha）のマントラ章を精査した。本章はヤジュルヴェーダ学派の中でタイッティリーヤ派のみが独自に伝えるものである。一般に，個々のマントラはブラーフマナにおいて引用され，解釈が与えられる。しかし，今回扱ったマントラ章は，同一文献内の準備祭に関するブラーフマナには殆ど引用されていない。一方，同派が伝える複数の祭式綱要書（シュラウタスートラ）では，古層の文献が一部のマントラのみを引用するのに対し，「新タイッティリーヤ派」に賦する諸文献はほぼすべてを引用している。即ち，当該マントラ章の扱いに関して，これを限られたもののみ引用する文献のグループと，ほぼ全体を引用するグループとの二大別が可能となる。このことは，タイ

ッティリーヤ派の文献が編集されてゆく過程と，新月祭・満月祭自体が整備されてゆく過程とを解明する上で，重要な示唆を与えるものである。従来，ヴェーダ文献の編集順序はブラーフマナ文献が祭式綱要書よりも完全に先立つと考えられてきた。しかしながら，その順序が絶対的なものではない可能性を考慮する必要性が，当該マントラ章の研究によって明らかにされた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

1. 西村直子　「Prajapati の骨盤が外れた神話」『印度学仏教学研究』64, 266－260, 2015

2. 西村直子「Rgveda X 128 Vihavya-Sukta の展開」『印度学仏教学研究』63, 837－843, 2015

3. Naoko Nishimura “ulba- and jarayu-: Foetal appendage in Veda” Journal of Indological Studies 24&25, 169－186, 2014

4. Naoko Nishimura “Processing of dairy products in the Vedic ritual, compared with Pali” Proceedings of 15th World Sanskrit Conference, Veda Session, 211－225, 2014

5. 西村直子　「タイッティリーヤ・ブラーフマナにおける新月祭・満月祭のマントラ－Upavasatha に関する III 7,4 を中心として」『論集』40, 125－150, 2014

6. 西村直子　「Maitrayani Samhita I 1,3m (IV 1,3p) － 新月祭・満月祭の upavasatha における搾乳と dadhi 製造」『奥田聖應先生斯学 50 年記念論集』271－285, 2014

7. 西村直子　「ヴェーダ文献における誕生の神話と儀礼－後産分娩を中心として」『論集』39, 75－92, 2012

8. Naoko Nishimura “The Development of the New- and Full-Moon Sacrifice and the Yajurveda Schools: mantras, their brahmanas, and the offerings” Proceedings of the 5th International Vedic Workshop, 印刷中

9. Naoko Nishimura “Mantra Collections used for the Darsapurnamasa in the Taittiriya-Brahmana: Focusing on the Upavasatha day” Proceedings of the 6th International Vedic Workshop，印刷中

〔学会発表〕（計　6　件）

1. 西村直子　「Prajapati の骨盤が外れた神話」第 66 回日本印度学仏教学会学術大会，2015.9.19. 高野山大学

2. Naoko Nishimura “A competitive calling on the gods for their coming to the sacrifice: the ‘Vihavya-Sukta’ RV X 128” 16th World Sanskrit Conference (Veda Section), Renaissance Rachaprasong (Bangkok, Thailand), 2015.6.29.

3. 西村直子「RV X 128 “Vihavya-Sukta”の展開」第 65 回日本印度学仏教学会学術大会, 2014.8.31.　武蔵野大学

4. Naoko Nishimura “Mantra Collections used for the Darsapurnamasa in the Taittiriya-Brahmana: Focusing on the Upavasatha day” 6th Inernational Vedic Workshop, Gateway Hotel Calicut (Kozhikode，India), 2014.1.7.

5. 西村直子「タイッティリーヤ・ブラーフマナにおける新月祭・満月祭のマントラ」第 55 回印度学宗教学会学術大会，2013.6.2.　駒沢女子大学

6. 西村直子「Yajurveda 各学派の Samhita における『搾乳と dadhi 製造』mantra 集」第 19 回インド思想史学会学術大会，2012.12.22.

〔図書〕（計　1　件）

1. 西村直子　第 8 章「インダス文明の牧畜」導入部, 並びに「8-3　牛を伴侶とした人々」，長田俊樹編『南アジア基層世界を探る』（地球研学術叢書）京都大学学術出版会，pp.234-236, 260-274，2013

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.sal.tohoku.ac.jp/indology/

６．研究組織
(1)**研究代表者**
西村　直子　（NISHIMURA, Naoko）
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：90372284

(2)**研究分担者**
(　　)

研究者番号：

(3)**連携研究者**
(　　)

研究者番号：